

## 『巴里籠城日誌』校訂現代語訳 (4)

松井道昭・横堀恵一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元 著

巻の4

西暦1870年11月3日（和暦明治3庚午年10月11日）。

11月3日<sup>1</sup>

仏政府の信任投票。

去る10月31日、パリ市内の民衆が騒ぎ、政府を一新し、現在の閣僚を替えようと計画し、国民衛兵達が隊列を組み、大いに政府に迫ったので、今日、市内20区の選挙民や諸兵隊が国防政府に従うか否かを表明するため、市内全20区で朝8時から投票が始まった。また、この投票は、予め朝8時から夕暮れ6時までと定めていたが、終日そのことを議論し、終わらなかった。引き続き、夜になっても、その変革の可否、従うか否かの2つの方向がまだ決まらなかったので、市中の議論が特に喧しかった。

昨日、政府の一員ロシュフォールが職を辞した<sup>2</sup>（このロシュフォールは、近年、しきりに共和制度を主張し、密かにこれを成立しようと企て、ナポレオンの在位中、度々その企てを主張し、色々と国政を誹謗し、そして帝を罵り、蔑む書籍を著述し、また、密かに帝を暗殺しようと企む党派の一人であり、ナポレオンが在位中に彼を牢に入れ、長い間幽閉した。し

---

<sup>1</sup> パリは、晴。

<sup>2</sup> 3日付le Temps引用のle Rappel記事（ただし、同紙11月3日号は仏国立図書館所蔵のものには、欠号である）。11日付le Rappelで辞任を再確認するロシュフォールの書簡を掲載する。

かし、去る9月4日、ナポレオンが敵の捕虜となった報せを聞き、この党派が激しい勢いで団結し、この機に乗り、国政を一変した連中である。彼は、国防政府に加わった後の功績がなく、別に専任の職務もなく、ただ、閣僚の列に加わるだけであったが、去る31日の騒動後その職を辞した)。

11月4日<sup>3</sup>

昨3日、政府信任投票の開票のため、パリ市20区全区長が出席し、その会が終日、終夜続き、また、海陸二軍と遊動国民衛兵の投票も終わり、今日、発表の開票結果が次のとおりである（表中で可が現閣僚をそのまま認める者、否が現閣僚を一新したい者である）。

パリ市市中 各20区の投票の表<sup>4</sup>

区	可	否	区	可	否
第1区	15,403人	812人	第11区	18,425人	9,114人
第2区	15,312人	827人	第12区	10,532人	1,925人
第3区	17,832人	2,086人	第13区	8,374人	1,870人
第4区	16,838人	1,823人	第14区	11,007人	2,424人
第5区	13,840人	1,839人	第15区	11,503人	1,627人
第6区	16,625人	816人	第16区	7,988人	189人
第7区	13,897人	683人	第17区	14,740人	2,364人
第8区	10,658人	264人	第18区	17,006人	5,882人
第9区	16,978人	709人	第19区	11,277人	3,415人
第10区	24,370人	3,406人	第20区	8,291人	9,635人

次にパリ市外の住民投票の表<sup>5</sup>

区	可	否	区	可	否
第1区	16,118人	1,075人	第3区	8,764人	186人
第2区	14,225人	647人	第4区	2,258人	35人

<sup>3</sup> パリは、晴。

<sup>4</sup> 6日付 le Gaulois

<sup>5</sup> 同上。

海陸軍・遊動国民衛兵兵士の投票<sup>6</sup> 可 236,623人 否 9,053人  
パリ市全住民の投票<sup>7</sup> 可 321,373人 否 53,585人  
合計で可とする者が557,996人、否とする者が62,638人。

今日の開票結果の公式発表では、現政府閣僚をそのまま承認する者の数が既に10分の9あった。ここで市内が統一され、落ち着き、安らかになった。

私が詳しく事情を観察すると、現在、世界万国の内で、文明開化し、豊かさ、強さを合わせ持つ国は、欧州に最も多い。中でも仏国は、その文明が世界に轟く一大強国である。我々は、日本にかつていた時に、仏国の状態を伝え聞き、また、その歴史を学び、長い間、常にその国が人材に富み、文化、教育、軍備が諸国の中で優れているのが羨ましかった。ところが、私は、今その都にいて、その国の得意とする陸戦を直接見、またその国の栄光と没落、国家の存亡の時期に至るといふ日に巡り合った。その戦鬪の勝敗等は、さておき、今、その政府や民衆の状態を見ると国家の存亡が間近に迫り、城門の外には無数の強敵が満ち溢れ、日夜隙を窺っている時期であり、人民が皆心を合わせて協力し、専ら防衛の手段をとるべきなのに、逆に政府を改革し、急に市内の人民を動揺させ、兄弟争うような内乱を生もうとする。狂っているのか？ 愚かなのか？ そもそも反逆者なのだろうか？ 我々は、その目的を全く理解できず、全く嘆かわしい。国の柱や土台となる報国や道義の心がなければ、悪い風習がどうかすると大波のように激動し、度々艦船をひっくり返そうとするような勢いになる。私は、今一人内心、文明開化が極まることは、それが及ばないことに近いのだと嘆く。哀しいものだ。

11月7日<sup>8</sup>

昨日、ヴェルサイユ城の普軍本陣で、欧州の英露墺伊4大強国の諸大臣に、普国のビスマルク大臣、仏国のファーヴル大臣とティエール代表等が

---

<sup>6</sup> 5日付官報。

<sup>7</sup> 5日付官報。

<sup>8</sup> パリは、曇霧。

会合し、和平を交渉したが、普国がその約束を拒み、和平会議が再び決裂し、4か国の大臣が空しく腕を組み、黙り込んだ。この結果、パリ市民の望みが絶え、再び戦争の議決をした<sup>9</sup>。

昨日、和平会議が決裂し、市内は、さらに防戦の備えをした。その歩兵、騎兵、砲兵の3軍の配置の概略は、次のようである<sup>10</sup>。

総司令官 トロシュウ將軍<sup>11</sup>

第1軍（パリ市城内の守備兵である。パリ周囲の砲台と呼応し、守備する兵である）

総司令官 クレマン・トマ將軍、総参謀長 モンタギユ大佐、常駐国民衛兵266大隊、騎兵軍団 クイクレー大佐、砲兵軍団 シェルシェー大佐

第2軍（進撃戦隊）

総司令官 デュクロ將軍、総参謀長 アペール將軍、同副総参謀長 ヴァールネ中佐、砲兵司令官 フレボー將軍、工兵司令官 トリピエー將軍、主計將軍 ヴォルフ將軍

この軍は、3軍団に分け、その指揮官と配置は、次のとおり。

第1軍団（3軍団中の攻撃軍）

総司令官 ヴィノワ將軍、総参謀長 ド・ヴァルダン將軍、砲兵司令官 ユベシー將軍、工兵隊司令官 プエ將軍、主計官 ヴィギエー主計官

第1師団 師団長 ド・マルロワ將軍、第1旅団 旅団長 マルテノー將軍、第2旅団 旅団長 パチュレル將軍

第2師団 師団長 モウデュイ將軍、第1旅団 地方の遊動国民衛兵集団 旅団長 ヴァランタン大佐、第2旅団 旅団長 ブレイズ將軍

第3師団 師団長 ブランシャール將軍、第1旅団 地方の遊動国民衛兵集団 旅団長 コント大佐、第2旅団 旅団長 ド・ラ・マリウーズ將軍

9 ヴェルサイユには、ティエールが行き、4か国代表同席の上での交渉ではなかった。

10 11月6日付官報。

11 この他、総参謀長シュミッツ將軍、副総参謀長フォワ將軍、砲兵総司令官グイド將軍、工兵総司令官ド・シャボー・ラ・トゥール將軍、主計將軍ヴォルフ主計將軍が記されている。

## 第2軍団

司令官 ルノー將軍、総参謀長 フェリ・ピサーニ將軍、砲兵司令官 ボワソネ將軍、工兵司令官 コルバン大佐、主計官 ベイヨ主計官

第1師団 師団長 スュスビエ將軍、第1旅団 旅団長 ボネ大佐、第2旅団 旅団長 ルコント將軍

第2師団 師団長 ベルトー將軍、第1旅団 旅団長 ボシェー將軍、第2旅団 旅団長 プティエー大佐

第3師団 師団長 ド・モースイオン將軍、第1旅団 旅団長 クールティ將軍、第2旅団 旅団長 ド・ランクロ將軍

第3軍団 3軍団中の応援部隊とする。

総司令官 デ・クセア將軍、総参謀長 ベルガリー大佐、砲兵司令官 プランストー將軍、工兵司令官 ラゴン大佐、主計官 プレヴァル主計官

第1師団 師団長 ド・ベルマル將軍、第1旅団 旅団長 フルネ大佐、第2旅団 旅団長 コロニュー大佐

第2師団 師団長 マッタ將軍、第1旅団 国民衛兵 旅団長 ファロン將軍(地方の遊動国民衛兵集団)、第2旅団 旅団長 ドードル將軍

騎兵師団 師団長 シャンペロン將軍、参謀長 ロスモルデユック騎兵隊長、第1旅団 旅団長 ド・ジェルボワ將軍、第2旅団 旅団長 クーザン將軍、憲兵騎兵連隊 アラヴェーヌ大佐

## 第3軍

パリ総督の特別指揮下

第1師団 師団長 スーマン將軍、参謀長 ペシャン中佐、第1旅団 旅団長 ダルジャントル將軍、第2旅団 旅団長 ド・ラ・シャリエール將軍

第2師団 師団長 ド・ラ・ロンシエール海軍少将、第1旅団 旅団長 ラヴォワネー大佐、第2旅団 旅団長 アンリオン大佐、第3旅団 旅団長 ラモット・テネー海軍中佐

第3師団 師団長 ド・リニエール將軍、参謀長 モルランクール少佐、

第1旅団 旅団長 フィロル・ド・カマ大佐、第2旅団 旅団長 ド・シャンベレ大佐

第4師団 師団長 ド・ボーフォル將軍、參謀長 ルコック少佐、第1旅団 旅団長 デュムーラン將軍、第2旅団 旅団長 ダンドレー海軍中佐

第5師団 師団長 コレアー將軍、參謀長 ヴィアル少佐、第1旅団 旅団長 シャンピオン中佐、第2旅団 旅団長 ポリオン大佐

第6師団 師団長 ドューグ將軍、參謀長 デロワ少佐、第1旅団 旅団長 ド・ブレ海軍中佐、第2旅団 旅団長 ブロー大佐

第7師団 師団長 ポチュオー海軍准將、第1旅団 旅団長 ルメン中佐、第2旅団 旅団長 サルモン海軍中佐

騎兵 第1旅団 旅団長 ド・ベルニス將軍、第2旅団 旅団長 ブロンデル中佐

11月8日<sup>12</sup>

今日の新聞中に、書き記すべき変わった珍しい話はなかった。

今朝7時、パリ在留の英国人その他外国人3百人余りが市内を退去した<sup>13</sup>。

昨日、市民投票の選挙によってパリ市20区の区長を新たに選出した<sup>14</sup>。その人名は省略する。

11月9日<sup>15</sup>

今日、新聞<sup>16</sup>を見ると、昨日朝英国人がパリ市退去のとき、仏政府は、その通行のため、士官に案内させた。この時、普軍陣地の前で両軍士官同士が会話した。普士官が仏士官にメッス要塞開城について、概ね次のように語った。

ガンベッタは、バゼイスが祖国を裏切ったと非難するが、とんでもな

---

12 パリは、曇。

13 10日付 le Rappelは、人数を英国人約100人、スイス人約15人とする。

14 11月6日付及び7日付官報掲載。

15 パリは、曇、夕方雨。

16 10日付 le Temps引用の l'Electeur libre

い。彼だけが真剣に抵抗し、我が普軍隊を度々痛めつけ、大変な努力で突破しようとした。降伏後、仏軍が皆ひどく飢え、馬もひどく疲弊し、大砲を曳けなかった。その状況で彼が最後の出撃をし、どうして彼がそれ以上抵抗するのを望めたのか。メッスの我が普軍がリヨンに向かった。メッス降伏前でも一部を南に振り向けたので、今頃は、我が軍も、大丈夫であろう。我らは、パリに入城したいわけではないが、諸氏の要塞の2つは、攻め取れることは確かだ。そうすれば、パリが手に入るだろう。それで、終わりだろう。我らも皆平和を望む。

11月10日<sup>17</sup>

今日、パリ市内の国民衛兵を以下の5分類に分けた<sup>18</sup>。

つまり、国民衛兵1大隊を8から10の中隊（士官を含め100人または125人）に分け、健全な者を以下の順序で充てる。

第1類が全ての年齢の志願者、第2類が20歳以上35歳までの独身者または子がない寡夫、第3類が35歳以上45歳までの独身者または子がない寡夫、第4類が20歳以上35歳までの既婚者又は家族を持つ父親、第5類が35歳以上45歳までの既婚者又は家族を持つ父親。

以上の5分類により、城内外の防衛に配置する。

11月11日<sup>19</sup>

新聞中にあること。

ベルリン市新聞は、今、普国で捕虜となっている仏軍の將軍兵士の数が負傷者を合わせ、32万3千人に上ると記す<sup>20</sup>。普国の軍備の金額がこの度の戦争の始めの7月19日から今日まで15億ターレルだという。もしこの戦争がなお3か月も続くと、普国に10年にわたる弊害を作り出すだろうと記す<sup>21</sup>。

<sup>17</sup> パリは、曇。日中電霰降る。気温摂氏2度。

<sup>18</sup> 9日付官報掲載の8日付国防政府令。その他細かな定めがある。

<sup>19</sup> パリは、快晴。

<sup>20</sup> 18日付le Journal des Débats引用のthe Times10月25日付ベルリン発記事。

<sup>21</sup> 出典未確認。なお、11月19日付le Siècleは、普国の年間歳入を168百万ターレル（同記事中約16百万ターレルを約60百万フランとするので、約630百万フラン）とし、戦費の15億ターレルは、多すぎ、1桁少ない150百万（1億5千万）ターレルと思われる。

去る9月17日のパリ籠城以来、市民が猫を殺して食べ、その皮の数は27,533枚であると市庁舎に書き出してあった。そして今市内に蓄えてある猫の数が約25万匹あると付け加えてあった。

パリ市内、犬猫の屠殺業者。最近、市内に犬猫の屠殺業者が現れ、その肉を売る店を開いた。また、兵士の駐屯地では主に犬を屠殺して食べるという。また、噂では、今市内で猫一匹の値段が約8フラン（日本の約1両8分）である。私が以上のことを記すのは、パリ市内の窮迫状態をはっきりと知らせるためである。

11月12日<sup>22</sup>

今日市内で異状がなかった。

最近、パリ市内の物価が騰貴し、新聞に次の一覧が載っている<sup>23</sup>。

燻製のハム1ポンド（16フラン。日本の3両1分）、牛肉（全く見当たらない）、馬肉1ポンド（2フラン。日本の1分2朱）、ロバの肉同じく（6フラン。日本の1両1分）、ガチョウ1羽（25フラン。日本の5両）、鶏同じく（15フラン。日本の3両）、鳩1番（12フラン。日本の2両）、七面鳥1羽（55フラン。日本の11両）、兎1匹（18フラン。日本の3両3分）、鯉1尾（20フラン。日本の4両）、鶏卵12個（4フラン6。日本の3分3朱）、人参1束（2フラン25。日本の1分3朱）、さや豆1ポンド（5フラン。日本の1両）、バター1ポンド（45フラン。日本の9両）、有塩バター1ポンド（14フラン。日本の2両3分）。

最近、市内の食料の値が以前の2倍、3倍更には5倍に上るものがある。そして買うにもその品が非常に乏しい。そこで附録で、昨日、ある豪商が市内の動物園で野生の猪の仔2頭を150フラン（日本の30両）で求めたという<sup>24</sup>。実に世間の人を驚かせる。

---

<sup>22</sup> パリは、晴雪。

<sup>23</sup> 12日付le Petit journal

<sup>24</sup> 出典未確認。



一昨日、パリ市内から出発した一気球が普軍の陣中に墮ち、その乗組員と機械が共に敵の手中に入った。この気球には多くの伝書鳩を乗せていたという<sup>25</sup>。

11月13日<sup>26</sup>

今日、市内に再び命令し、25歳以上35歳までの市民をその職業や地位を問題にせず、皆徴兵することにした<sup>27</sup>。同時に、防衛戦で負傷または戦死した国民衛兵の家族の扶助の措置を発表した<sup>28</sup>。

また、新聞が普国でこの度の捕虜や捕獲品に不足しないと書いた<sup>29</sup>。仏国旗数本、大砲数十門、兵士30万人余り、士官数千人、将軍数十人、元帥数人や仏帝ナポレオンを合わせ、その掌中にし、そしてパリもまた近い内に陥落するかという勢いであり、今回の普軍の捕獲した品々には何ら不足しなかった。実に仏国が未曾有の大敗北だという。

11月14日<sup>30</sup>

11月11日付トゥール発ガンベッタのファーヴル宛報告<sup>31</sup>による。去る9日から2日間の戦闘の後、オルレアンを占領し、我が仏軍は、おおいに勝利を得、捕虜千人余り、大砲2門、大量の食糧荷馬車や20箱余りの火薬等を捕獲した。また、去る9日には、クルミエール<sup>32</sup>で激しく戦争をした。この2日間の味方の損失が2,000人足らずであり、敵軍の死傷者数が更に大きい。

---

25 13日付官報。

26 パリは、快晴。

27 13日付官報掲載の12日付国防政府令は、これまで徴兵対象とされながら遊動国民衛兵隊に属さなかった、25歳から35歳までの未婚者又は子のいない寡夫であって、全く兵役に服したことの無いセイヌ県住民及び他県住民で現在セイヌ県に居住する者を召集するものである。同時に、ジュール フェリー一名で該当者のこの発表後48時間以内の居住地の区役所への出頭を命じている。

28 13日付官報掲載12日付国防政府の国民衛兵宛告知文。負傷者や遺族への年金、補償、遺児の国家による養子縁組などの措置を示す。

29 出典未確認。

30 パリは、晴。

31 15日付官報。

32 仏軍の唯一の戦勝。

この報告書が伝書鳩の首に結び付けられ、昨13日夕方4時にきたという<sup>33</sup>。  
この報告を伝聞し、市内の人民が大いに奮い立った。

今朝、総督トロシユウ将軍が市中に指示の張り紙をした。その大意は、今フランスに危急が実に間近に迫り、民衆が一層その身を投げ打ち、国に報いるべきである。長い文章をこのように省略する<sup>34</sup>。

今日再び、25歳以上35歳までの市民を徴兵する旨布告した<sup>35</sup>。

来る15日からパリ市諸道路への門戸を夕暮れ5時に閉じるという通知<sup>36</sup>があった。考えると、このところはもう日が短く、夕方5時で日が既に没し、黄昏となるためである。

今なお普国のスパイがパリ市内に潜んで住んでいる。一昨日の夜、オペラコミック（劇場である）の近辺で一人の婦人を捕えた。これがスパイだという<sup>37</sup>。

最近パリ市外では、多く疫病や天然痘が流行し、普軍では、このため亡くなる者の数が日々多くなり、またパリ市内でも大いに流行伝染し、国民衛兵で亡くなる者もまた多かった<sup>38</sup>。

11月15日<sup>39</sup>

去る9日、オルレアンの戦闘で、普軍の死亡が約2,500人、内57人が隊長の士官、202人が小隊長の士官である。なお、この他に450人の負傷者があった<sup>40</sup>。

現在パリの機械所で1週間毎にミトラユーズ砲（仏国が近年新しく製造した珍しい砲である）を8門と他の大砲を8門製造するという。このミ

33 出典未確認。

34 14日付官報。パリ総督のパリ市民、(常駐)国民衛兵、軍と遊動国民衛兵宛声明である。

35 14日付官報。国民衛兵への1870年度の徴兵対象者への動員を命じる13日付国防政府令である。

36 14日付官報掲載13日付パリ総督参謀長シュミッツ将軍名の通知。

37 出典未確認。

38 13日付le Rappel引用のl'Electeur libre。普軍3万人が病に罹り、内2万人が天然痘でパリ市内よりもパリ周辺に病人が多いと報じる。

39 パリは、晴。

40 出典未確認。

トライユーズという砲は、大砲12門から37門を組み合わせて、製造する砲であり、今、なお大砲50門を組み合わせて製造するミトライユーズ砲がある。この37門を組み合わせたミトライユーズ砲は、1分間に5回発砲して185発の弾丸を発射し、5分間には925発の弾丸を発射するという珍しい砲である。通常、大砲は、5分間にただ1回弾丸を発射する。

11月16日<sup>41</sup>

新聞中に変ったこと珍しいことはない。また最近、城外の戦争の報道がない。

普国ベルリンの11月1日付新聞が、漸く今日市内に届いた。その中に、メッセ要塞に籠城した司令官バゼイヌ元帥が15万人の兵と共に普軍に降参し、開城し、即日、普国に到着し、11月1日午後3時半、仏帝ナポレオンに拝謁したという<sup>42</sup>。その他、多く当日の状態を載せるが、皆遙かに以前のことであり、全ては、記さない。

11月17日<sup>43</sup> (パリの籠城は、今日すでに60日である)

新聞中に変ったことがない。最近の市内は静かで穏やかである。私は、密かに仰いで政府の事情を察し、伏して世間の状態を見ると、民衆の心がただ和平と戦争の二つの道に迷い、あるいは出て、勝敗を決しようといひ、あるいは屈して、和平を考えようといひ、国民は、更にその方向が分からない。思うに、政府は、既に、度々その機会を失い、今はその目的がない。また食料の品々が日々不足し、貧民が切迫し、町中で叫び、道路の犬猫を殺して食べる。その困窮を実に知る必要がある。現在の政府は、これをどう処置するのか。

今夜、私は機械博覧講義局<sup>44</sup>に行き、最近初めて鑄造された新式の元込め砲の利点の講義を聞いた。この大砲を軍務省で試験し、2,000メートル(日

41 パリは、晴、夕刻小雨。

42 17日付le Temps引用のle Gauloisの2日及び3日付ロンドン発行紙の11月1日付報道との引用。

43 パリは小雨、深霧。

44 技能博物館(コンセルヴァトワール・デ・ザール・エ・メティエ)内にある講義室。

本の19町)の距離で、2つの弾丸を発射し、同一の穴に入れたという。近世で未曾有の精巧な奇砲であるという。

仏国は、兵器に富む。大砲にはミトラユーズがあり、小銃にはシャスポーがあり、奇抜で精巧であることは、実に驚愕すべきである。しかし、その人心は発憤の氣力がなく、これをまた憂い、嘆くことに堪えられない。11月18日<sup>45</sup>

普国ベルリン10月28日付新聞を要約する市内の新聞<sup>46</sup>では、同日、メッス要塞開城、仏軍降伏の日、普軍司令官フリードリヒ・カール親王が太鼓を打ち鳴らし、軍旗を掲げ、メッス要塞に入った。その捕虜と捕獲した物品が元帥3人、将軍50人、大佐以下の士官6,000人、遊動国民衛兵を含む兵士17万3,000人、大砲400門、ミトラユーズ100門である。

この度このメッス要塞を囲んだ独軍が7軍団、普後衛兵1師団、ヘッセン1師団の22万人だった。開城後その城に残った兵が2万人であり、他は、戦場に向かったという。今、普国に捕虜となっている仏軍将師や士官・兵士の数が次のとおり。元帥4名(バゼイス、マクマオン、ル・バフ、カンロベール)、将軍140名、士官が大佐以下1万名、兵士32万3000人、この他、仏帝ナポレオンも捕虜となった(以上、10月25日の計算である)<sup>47</sup>。

この度の戦いが仏国未曾有の大敗であり、パリがこのように激烈な攻撃を受けたことは、仏国の歴史中いまだ見ない。

11月19日<sup>48</sup>

昨日18日、国防政府令<sup>49</sup>で、パリ市国民衛兵隊の諸士官や兵士の給料を定めたという。その概略は、次のとおり。

1か月の給料、大隊長が333フラン33サンチーム(日本の66両2分余)、

---

45 バリは、深霧。

46 18日付le Journal des Débats引用の10月25日付ベルリン発the Times

47 上記le Journal des Débats引用のthe Times記事。

48 バリは、曇。

49 19日付官報。

大尉と外科軍医が236フラン10サンチーム（日本の47両余）、中尉と軍医助手が166フラン66サンチーム（日本の約33両）、少尉が150フラン（日本の30両）、副官の大尉が別に月々50フラン（日本の10両）を受け取る。国民衛兵隊が一律に一日1フラン半（日本の1分2百文）。この定めはパリ市街で行動した日からである。そして城外で野営すれば諸食料等皆、政府から給付される。

11月20日

今日、新聞に異状がなく、市内が殊に静かで穏やかである。また城外の戦争の報道はない。

パリ市内に貯蔵するガスが不足し<sup>50</sup>、石炭が当然乏しい。そこで、この2、3日以来、石油を灯火に使い、市街が夜中朦朧とする。また、各家は、全て夜10時半からその灯火を消した。

11月22日<sup>51</sup>

新聞中に変わった珍しいことはなかった。

写真の書簡。今回の籠城中、仏政府派遣部所在地ツールやその他諸地方からパリへ送る急報や重要な新聞等は、これを集め、薄い紙に写真で縮小<sup>52</sup>し、その重さや量を減らし、伝書鳩の首や羽の下に結び付け、これを放した<sup>53</sup>。パリ市内へ色々な地方から送る報告や新聞は、多分この写真の書簡である。この度は、鳩が密使となり、大変便利であり、人は、初めてその重要性に驚いた。

今日から政府貯蔵の塩漬け獣肉を市中に分配し、市民が皆同じように塩漬けの肉を食べた。私もまた塩漬け獣肉の味を知った。

11月23日<sup>54</sup>（日本の閏10月1日である）

今日、城外の砦、要塞の前にいた国民衛兵隊4人が負傷し、彼らを市内

50 14日付le Temps引用のle Soirは、20日からの個人住宅向けガス供給停止を予告する。

51 パリは、曇、小雨。

52 要するにマイクロフィルムである。

53 このやり方は、15日付官報に掲載。

54 パリは、晴。気温摂氏9度。

に送って来たという<sup>55</sup>。

新聞を見ると、パリ在留の南米のブラジルの外交使節が市内から退去を求め、先日来、両国政府と交渉したが、普軍の本陣からまだその通行証が来ない。しかし、この度、敢えて市内を出、普軍前營に着き、その通行を求めたところ、この陣の司令官が直ちにヴェルサイユの本陣にそのことを告げた。首相が容易にこれを許し、速やかに軍中を通行させたので、直ちにロンドンに向かったという<sup>56</sup>。

11月24日<sup>57</sup>

去る19日、ビスマルク首相がヴェルサイユ城の普軍本陣から、パリ在留のウォッシュバーン米合衆国公使へ一文書<sup>58</sup>を送った。

その文の要旨は、

先日のご書面によるファーヴル外務大臣からの非公式のレナル氏の消息依頼の件で得た情報では、同氏が情報を敵に通報するとの証拠があり、軍当局が逮捕し、軍法会議で裁くためドイツに送ったとのことである。この機会をお借りし、最近、パリ市内を出発した幾つかの気球が我が軍の手に入り、乗員が同様に、戦時法規により、裁かれることになった。このことを仏政府にお伝え頂きたく、今後とも許可なく我が軍を越えたり、我が軍を損なう情報を持つ者は、我が軍に捕まれば、通常の方法で同様の行為をした場合と同じ扱いになることを申し添える。敬具。

上の書簡を直ちに同合衆国公使から仏政府に伝達したので、今日、政府がこれを新聞に載せ、発表した<sup>59</sup>。

11月25日<sup>60</sup>

---

55 出典未確認。

56 出典未確認。

57 パリは、晴。

58 25日付官報。これは破棄院（最高裁判所）ド・レナル次席検事が息子のヴェルサイユのレナル検事代理が独軍当局に逮捕されたと聞き、ファーヴル大臣にその消息を依頼し、非公式にウォッシュバーン公使がビスマルクに対し問い合わせ、得た返事である。

59 同官報に掲載の政府声明は、いずれも無辜の市民に対する権利侵害であり、普国の横暴を全欧州に訴えるとする。

60 パリは、曇。

今日市中に11月25日付総督命令の発表<sup>61</sup>があった。

明後日、27日、日曜日から新たな命令があるまで、城壁の諸道への門を一切閉鎖し、その出入りを禁止する。その出入りができるのは、軍と物資の通過、軍のための軍や民間の車列、個別の軍隊、城外での軍事工事に携わる技師と職工だけである。

11月26日<sup>62</sup>

新聞中に、新しい記事や変わったことはない。ここに一つの小さな笑話がある。今日、市中警衛の国民衛兵がある豪商の家に行き、密かに貯蔵する食料品の有無を検査したところ、その家の地下蔵に1,714個のハム（塩漬けの豚肉である）を見て、直ちにこれを当局に告げ、その家の主人が罰せられたという<sup>63</sup>。この頃、市中の食料の品々が不足するので、このような小事件が非常に多い。

最近の市内の食料は、少量の塩肉や塩魚のみで、塩漬けでない馬肉を得るのも非常に難しい。塩肉や塩魚の味は、とても不味い。

11月27日<sup>64</sup>

今日、私は、技能博物館<sup>65</sup>に行った。この中に、蒸気車、蒸気船、風車、気球、水車、天文測量器、地中検査器やその他の各器械、更には各種の時計、磁石、織物の器械、耕作の諸道具に至るまで全ての品や種類を展示していた。欧州が器械に優れていることは、実に人の目を驚かせる。

帰路、市街を通り過ぎ、その状態を見ると、この日は、日曜日なので途中には散歩し、歩き回る人が特に多い。屈強の男達できれいな服を着て、その妻の手を取り、ゆっくりと散歩する者が幾千人であるのか分からない。この連中は、皆、今、仏国がほとんど敵の掌中に堕ちいろうとし、危急存亡が朝夕に迫り、その危うさがまさに朝露のようであることを知らないよう

---

61 26日付官報。

62 バリは、曇、小雨。

63 出典未確認。

64 バリは、曇。

65 技術教育・技術博物館・工業的実験を兼ねる施設。タンブル地区にある。

である。パリ市民は、虚飾に集中し、言葉を巧みに操り、胸の内には報国の真心がなく、常に国政を罵るが、危急に臨んでも、国を顧まないようだ。その節操の薄さは、また、私の仲間の目を驚かせる。思うに今、仏国の兵器や機械が精巧であり、実に良質で美しさを極めているが、政府に人材がなく、民間に節操がなく、威力武力が衰え廃れ、強敵に当たっていくだけの精神がない。ああ、国にすばらしい機器があっても、人材がなければ、またこれをどうすることもできない。

11月28日<sup>66</sup>

最近、兵隊が多く城外に出陣する。また、今夜、パリ総督トロシェウ將軍が市内の兵を率い、城外に出陣した、と報じる<sup>67</sup>。これは近日中に一戦があるためである。しかし、市内の兵力が大きく衰弱すると思われる。

市民集会所（クラブ）。このほど、市内所々に市民のクラブを設けて、多人数が会合し、各々がその席で時世を話し、持論をはくことは、立法院に似る。今夜、私がこのクラブに行き、聞くと、市民がしきりに欧州各国の事情や状態を論じていた。

今日、市中に国防政府令<sup>68</sup>が発表された。今回の籠城中、市民が皆国民衛兵となった。そこで、先日から国民衛兵一人に毎日1フラン半（日本の1分1朱位）を与えた<sup>69</sup>。今回、また、その国民衛兵の妻に1日75サンチーム（大体日本の2朱余り）の補助金を与える。これは物価が騰貴し、貧しい者の家計を助けるためである。

11月29日<sup>70</sup>

今暁3時頃から城外で激しい砲声が聞こえ、終日砲戦があった。

今日、政府から市民に発表<sup>71</sup>した。昨夜から市内の兵隊が城外に布陣し、

66 パリは、曇。

67 29日の項の注記の29日付官報。

68 同上。

69 19日の記事参照。

70 パリは、曇。

71 29日付官報掲載のトロシェウ総督の侵略と征服政策に断固抵抗する旨の市民、軍・国民衛兵隊兵士への28日付宣言。



所々で戦争が始まり、今日明け方から激しい砲声が聞こえる。そして、パリ総督トロシュウ將軍が陣頭で指揮を執る。今朝、総督から政府に送った報告書<sup>72</sup>に、城外の各陣や部署は、既に準備を整え、盛んに戦闘を開始したと記してある<sup>73</sup>。

今夜、私の知人、レスピオー氏からの一文書に、今日の戦争で部下の兵士の損失が200人余り、その内、大尉1名、中尉3名、兵士50人が戦死し、90人余が敵の捕虜となり、負傷者が特に多いという。その他、今日戦った数大隊の死傷者がまだはっきりしない。

11月30日<sup>74</sup>

今暁3時頃から、城外に大いに砲声が轟き、終日絶え間なかった。夜になり、終わった。

市中では、各家で灯火に使うガスを止めた。パリ市内は、石炭が次第に不足し、ガスの使用が日毎に減少し、今夜から市内の人家がその部屋の中の灯火に使うガスを一切禁止し、各々ろうそくでこれを代用するが、市街の道路の灯火だけこのガスを使う。しかし、この灯火も、先日以来大きくその数を減らし、ただ、僅かに路上を照らし、通る人や馬車の行き来に便利であるだけである。市内の窮迫が分る。

去る11月16日付の西国首都マドリードの新聞<sup>75</sup>が漸く今日パリに届いた。その報道では、西国は、かつて普国のホーエンツォレルン親王を国王に擁立する約束が破れた後、国民も騒ぎ、全国の意見が定まらなかった。そこで今度、西国議会で全国からの345人の議員が選挙で国王を選んだ。その投票結果が次のとおりである。

アオスタ公<sup>76</sup> (伊国王の子) 191人、共和制度63人 (共和民主3人)、<sup>77</sup>モ

72 30日付官報掲載のシュミッツ参謀長の報告。

73 この日、国防政府は、軍当局発表以外の軍事情勢に関する報道を禁止し、違反した新聞の発行を中止する命令を出した (30日付官報)。

74 パリは、晴。

75 30日付le Journal des débats掲載の16日付マドリード発the Times。

76 この後、西国王アマデオ1世。1873年に革命により退位。

77 正元はこのように記すが、上記の出典には見当たらない。

ンパンシエ公（仏王ルイ・フィリップ王の末子）27人、エスパルテロ<sup>78</sup>氏（西国元首相）8人、アフォンソ親王<sup>79</sup>（葡国王の子）2人、モンパンシエ公夫人<sup>80</sup>1人、白紙の投票（その内12人が女王の前に在位した王の男系子孫を国王にしようという者<sup>81</sup>）19人。

この投票は、過半数（173票）で決めるので、数を検査すると、345人の内、アオスタ公に票を投じた191人に2人の賛同者を加え193人により、アオスタ公を選ぶことを議会議長が宣言した。

12月1日<sup>82</sup>（和暦閏10月9日である）

戦況報告<sup>83</sup>が新聞にある。昨日は、終日戦ったが、夕刻になり、仏軍がマルヌ川を越え、進撃し、普軍が大砲2門を残し、負傷や死亡の者を打ち捨て、退散した<sup>84</sup>。

サン・ドニ方面で仏軍が大砲2門を奪い、さらに72人を捕えた。味方の死傷は、不明であるが、少ない見込み<sup>85</sup>。

今朝、総督トロシュウ將軍からパリ市のシュミッツ参謀長へ我が軍隊が昨日来、占領した位置に留まり、敵軍残した負傷者を收容し、死者を埋葬した。我が軍の意気が殊に盛んであると報告した<sup>86</sup>。

12月2日<sup>87</sup>

昨一日は、終日大戦闘がなく仏軍が所々、陣地を配備し、終日味方の死

78 当時は、政界から引退していた。

79 1865年7月31日生まれ、1870年には5歳。

80 イサベラ女王の妹である。

81 カロリスタ。イサベル女王の父王フェルディナンド7世が彼女に王位を継がせるため、議会に諮らず、男系相続を廃止したため、同王の死後、同王の末弟カルロスの即位をボルボン家の正当性を根拠に主張した。

82 パリは、晴。

83 12月1日付官報掲載。

84 総督からシュミッツ参謀長への報告。

85 30日午後8時20分発サン・ドニ総司令官から総督宛報告。

86 2日付官報掲載1日付報告。

87 パリは、晴、気温は零下6度。

亡者を埋葬するだけであった。

今日、多数の負傷者を車に乗せ、市内の病院に連れ帰った。

今日、政府は、アミアンの県知事の11月20日付報告を得た。その文では、先日のオルレアンの戦争後、大戦争がない。仏地方の北部シャティヨン・シュル・セヌ<sup>88</sup>で普軍7～800人が仏側ガリバルディ将軍に奇襲され、全て死傷するか、捕えられたという<sup>89</sup>。

新聞<sup>90</sup>を見ると、去る10月27日、メッス要塞が開城の際、仏軍の総兵力が13万5千人で、この内、負傷兵が2万5千人、また1万人が病人であった。精兵といっても、全てで10万人である。これは歩兵、騎兵、砲兵3兵の合計であるが、騎兵隊や砲兵隊は、メッス城中の馬を食べ尽くし、用いられなかった。ついに城中に食料が尽き、弾薬が尽き、全員開城降伏し、将軍、兵士ともに生け捕られた（この城の司令官バゼイヌ元帥がメッス要塞に入った8月17日から10月27日まで全70日余り籠城した）。

12月3日<sup>91</sup>

新聞中に昨日の戦争の状態の記録があった。総督トロシウ将軍が12月2日夕3時10分、陣中から報告<sup>92</sup>を発信したという。

今朝、夜明けに、普軍が強力な兵力で仏軍の先鋒デュクロ将軍の陣を襲撃した。我が軍には、敵襲を防ぐ準備が既に整っていた。アヴロンの陣地、ノジャン、フェザンドリー、グラヴェルの各要塞、サンモールの諸砦やシャラントン要塞からの砲撃の進展が敵軍の進撃を防いだ。普軍の歩兵は、森林中に退却したが、我が軍が優勢である。この襲撃の知らせにより、参謀長が、ヴィノワ将軍と既に現場に国民衛兵33個大隊を出

88 バリ市南郊。

89 2日付官報。

90 2日付le Siècle引用の11月18日付the Daily Telegraph掲載のシャンガルニエ将軍のインタビュー記事。この中で同将軍は、バゼイヌ元帥は裏切ったのではなく、無能故に降伏したと述べる。

91 バリは、曇、小雨。気温は、零下2度。

92 3日付官報掲載政府発表。

動させたクレマン・トマ将軍に出動させた。その時に、ド・ボーフォール・ドブル将軍とド・リニエールの2将軍も活発な牽制攻撃を行ったとのことだ。

また、以下のトロシュウ将軍の12月2日夕5時30分発報告<sup>93</sup>。

12月2日、ノジャンの陣に5時に戻った。明け方、敵軍が予備軍と新たな戦力でわが先隊に襲撃したが、3時間かけて陣地を守り、5時間かけて、敵陣を奪い、そこで寝た。多くが家に戻れなかったが、この残念な死者は、この若い共和国にとり、国の軍の歴史に輝かしい1頁をもたらした。

昨日、戦闘<sup>94</sup>中、先鋒の勇将ルノー将軍が敵の弾丸に右足を撃たれ、非常な重傷で速やかに病院に送り、療養をした<sup>95</sup>が、数か所に傷があり、ついに今日死去したという<sup>96</sup>。今年62歳であった。

この度の戦闘は最近の一大戦であり、敵の死傷者が莫大であった。仏軍にもまた死傷者が多いというが、政府が隠し、示さなかった。最近市内に運ばれる負傷者は数千人であり、この時の戦死・負傷・捕虜は約一万余人りという。しかし、まだはっきりしない。

12月4日<sup>97</sup>

昨日、国防政府閣僚一同からパリ防衛の総督兼大統領トロシュウ将軍に以下の要旨の内容の書面<sup>98</sup>が贈られた。

この3日間、我々は、貴殿と共に、国運を決める光輝ある戦いの場に思いを馳せる。我々は、貴殿の危機も分かち合うが、その危機の中で、よく準備され、貴殿の貴い忠誠により今や確実となった我が勇敢な軍の成功の栄誉は、貴殿に帰せられる。それに高ぶらないことは立派である

---

93 3日付官報。

94 「シャンピニーの戦い」又は「ヴィリエーの戦い」という。

95 2日付官報。脚の切断手術をすることとされていた。

96 死亡につき、7日付官報掲載の6日付戦況報告は、同日朝とする。

97 パリは、晴、寒風が酷い。

98 3日付官報掲載であるので書簡発出は、2日となる。

が、貴殿の模範に感動した仲間の兵士からの喝采を避けられない。我々の喝采を心地よく送りたい、少なくとも貴殿に感謝と愛惜の気持ちを表したい。我が軍の勇敢なデュクロ將軍、かくも献身的な貴殿の諸將校、諸勇士に、我々が賞賛すると伝えて欲しい。今、仏共和国は、その救いとなった、彼らの気高く純真な勇ましさを認め、それが仏共和国を救う希望とした。我々は、貴殿の同僚として、これらの美しく偉大な日々が我々の解放の始まりとなると深く確信し、喜んで歓迎する。

今日、新聞中に新しい報告が多いが、かなり煩雑になり、今はここに記載しない。

外国の諸新聞は、露国がトルコに対し戦端を開こうとし、その勢いが極めて切迫するという<sup>99</sup>。黒海を巡る一つの争いである。

12月5日<sup>100</sup>

デュクロ將軍の軍がヴァンセンヌの森の中で野営した。捕虜の普軍士官、兵士400人が市内に送られた<sup>101</sup>。

去る2日の戦争で將軍士官の負傷と戦死は、次のようであった。

ルノー將軍が足に流れ弾を受け、病院でついに亡くなった<sup>102</sup>。ラドレイ將軍が砲弾2発を受け、負傷した後、亡くなった<sup>103</sup>。パチュレル將軍とボワソネ將軍が負傷し、入院した<sup>104</sup>。ド・グランサー大佐が戦死<sup>105</sup>。ヴィリエ大佐が負傷<sup>106</sup>。ヴィネラル大佐やイレ・エ・ヴィレンヌ大隊の指揮官全員が戦死したという<sup>107</sup>。將軍死傷4名。1人が戦死、3人が負傷。大佐の死傷

99 11月11日付la Presseが露国のトルコに対する開戦の動きを報じたが、12月3日付le Siècleは、the Standardとthe Daily Telegraph記事を引用し、露国が1856年のパリ講和条約違反の動きをすとし、英国が露国を牽制しようとする旨報じる。

100 パリは、晴。

101 4日付官報。

102 7日付官報掲載の6日付シュミッツ参謀長の軍事報告。

103 4日付官報。

104 同上。ただし、入院については触れていない。

105 同上。

106 同上。

107 同上。ただし、翌5日付官報は、指揮官全員戦死は誤りで、負傷者はいたが、死者がいなかった、と訂正した。

が3名。1人が戦死、2人が負傷。その他の士官兵士の死傷が明らかでない。

今夜、私の知人のレスピオー中佐が、私が仮住まいする学校に来た。幸い、会うことができ、このほどの戦闘の事情を聞いた。この人は、今度位が一級上がり、大佐となった。去る29日、ムーラン・ド・サケ砦での激戦では、部下の士官兵士等の死傷捕虜全てが280人、内、大尉1名、中尉3名、兵士50人が戦死し、兵士89人が敵の虜となった他は、全て負傷者であると語った。

12月6日<sup>108</sup>（パリ市籠城が今日で既に80日である）

昨日、内務大臣の確認した戦況報告<sup>109</sup>では、これまでに、普軍士官兵士合わせて800人超の捕虜を市内に送ったという。

現在、市内の食料の獣肉が全て尽き、政府貯蔵の塩漬けの獣肉や塩魚等を少しずつ市中に分配する。そして、市中では、犬猫や鼠<sup>110</sup>を捕って食べることが特に多い。先日以来、市中輸送の馬車の馬を屠殺することが既に多い。しかし、この馬肉を広く市民に支給するには足りない。そこで政府は布告し、屠殺業者と肉屋達に獣肉の代わりに干し魚や塩魚の類を売らせた<sup>111</sup>。

先日以来、市内所々に犬、猫、鼠の多くの屠殺者が店を開いた。そして今日、犬の肉が最も高価で、その腿肉一本の値が8フラン（日本の1両2分2朱に当たる）という。最近の市民の食料の肉の多くが犬や猫の肉だという。市中の野菜が特に少なく、さらに市内では、パンを作る穀類が乏しく、物価が益々高騰するという。

12月7日<sup>112</sup>

本陣ヴェルサイユ城のモルトケ將軍とパリ総督トロシュウ將軍との書簡

108 パリは、朝、小雪寒風甚だしい。

109 6日付官報。

110 11月12日付 *le Siècle*

111 出典未確認。

112 パリは、曇。寒気酷烈。

交換の経緯を説明の発表文<sup>113</sup>。

(モルトケ將軍の12月5日付書簡)

ロワール軍が昨日、オルレアン近くで敗北し、同市は、再度、独軍が占領したことを閣下にお知らせすることが役立つと存じる。しかし、將軍が一士官を派遣し、それをご確認したいのであれば、私は、その士官に我が軍中を往復する通行証をお渡しするに吝かではない。敬具。

(総督の12月6日付返書)

閣下は、ロワール軍がオルレアン近くで敗れ、同市を再度独軍が占領したことを私に知らせることが役立つとお考えになった。私は、そのお知らせを頂いたことを認めるのを荣誉と存じるが、閣下が示された方法で確認する必要を認めない。敬具。

(12月6日付国防政府声明文)

この敵軍から来た報告が正確であるとしても、我々の救援に駆けつけようとの仏国内の大きな動きに期待する我らの権利を妨げるものではなく、我らの決意と義務を変えるものではない。一語で言えば、戦おう！ 仏国万歳。共和国万歳。

考えると上の報告の虚実は、もとより、知ることができない。しばらく、その真偽はおいて、ただ、当日の両軍間の実情を観察すると、これは全く普軍参謀部の策略だろうと推察して分かる。

今、市内では、諸地方から国民衛兵の応援が来るのを待ち、ロワール軍を第一の救援軍とし、この救援軍が近い内に敵の後ろに迫り、市内を応援することを期待する。しかし、今この軍が全て敵軍に圧倒され、敗れ、遠くに陣を引き上げたといえ、市内の望みが全く絶え、気力が一時に衰え、それに従い、必ず防戦の力を削ぐ。恐らく、普將軍の策略の意図がここにあるのではないだろうか。もし、今、仏將軍が使者を派遣し、その真偽を調べても、徒に日時を費やし、さらに防戦の気力を挫くだろう。思えば、トロシュウ將軍は、このことを察し、この返書を送ったのだろう。さて、

---

113 7日付官報掲載。

トロシユウ将軍がその事件を直ちに市内に公開し、努めて防御の努力を強化するため、血戦の他はないということを記した一文書を添えたものであろう。優れた将軍の雄大な計略であり、その内容が深い。

12月8日<sup>114</sup>

今日、午後、私は、市街を散歩し、事情を見るが、市内は平和で静かである。帰り道に王城の前を通り過ぎると国民衛兵7大隊が出陣するのを見た。士官にその数を聴くと3,500人だという。

去る11月28日、29日、30日と12月1日の戦いについて、仏軍の死傷者数を官報に載せた<sup>115</sup>が、次のようである。

将軍以下士官合わせて戦死72人、負傷342人、第2軍、第3軍、サン・ドニ軍団の3兵合わせ、諸兵士の戦死936人、負傷4,680<sup>116</sup>人、総計6,030人、戦死の士官兵士1,008人、負傷の将軍兵士5,022人。この発表中、死傷者の数だけ記し、捕虜の数を記してないのは、その捕虜数がまだはっきりしないからである。

12月9日<sup>117</sup>

新聞<sup>118</sup>の附録記載の普国が現在所有する軍諸艦船の種類。

フリゲート艦という蒸気スクリューによる大軍艦3隻、第1艦をヴィルヘルム<sup>119</sup>といい、大砲23門、1,150馬力。第2艦をフリードリヒ・カール<sup>120</sup>といい、大砲16門、950馬力。第3艦は、クロンプリンツ<sup>121</sup>といい、大砲16門、800馬力。鉄張り軍艦2隻、第1艦をアルミニウス<sup>122</sup>といい、4門の大砲を備え、300馬力。第2艦をアダルベルト<sup>123</sup>といい、3門の大

114 暁から霧深く、朦朧。

115 8日付官報。

116 上記官報は、救急車で運ばれない軽傷者を含まないで負傷者の少なくとも3分の1しか示さないと注記する。

117 パリは昨夜、雪が降り、曇。

118 出典未確認。

119 普王の名。

120 普王の甥の名。

121 王太子の意味。

122 ゲルマンの英雄の名。

123 ゲルマンの英雄の名。



砲を備え、500馬力。コルヴェット<sup>124</sup>という軍艦が5隻ある。各28門の大砲を備え、400馬力の蒸気艦である。その名称をアルコナ、フィネタ、ヘルタ、エリザベト、ガゼルという。コルヴェットボンラという蒸気艦4隻。艦毎に17門の大砲を備え、200馬力、その名称をアウグスタ<sup>125</sup>、メデューサ、ニンフ、ヴィクトリアという。別に3隻のモニター<sup>126</sup>という軍艦がある。これはアメリカ製である。シャルーフという小型船舶が10隻、艦毎に3砲を備え、90馬力の蒸気艦である。第2等のシャルーフ艦16隻、艦毎に2砲を備え、60馬力の蒸気艦である。蒸気両輪の小型船舶数隻がある。その数が不明である。両輪船の軍艦一隻の名をバルバロッサ<sup>127</sup>という。その他また43隻の両輪の蒸気艦や数多くの他の船がある。その数は不明。帆船がまた数隻ある。テティス、ゲフィオン、ニオベ、ヘラ、ロフェール、ムスキト等である。

その他また帆船が数多くあるが、その数が不明である。上に書き記した軍艦は、最も有名な軍艦のおおよそのものであって、その他の小型船に至っては、全てこれを枚挙できない。

市中に発表の12月7日付国防政府令<sup>128</sup>による。この度、軍の先頭で栄光の戦死を遂げたルノー將軍の葬儀を廃兵院<sup>129</sup>の教会にて、国費で行う。軍務大臣が本命令を執行する。

12月10日<sup>130</sup>

捕虜の士官の交換。

一昨日、トロシウ將軍は、城外の陣<sup>131</sup>中から以下要旨の緊急の手紙<sup>132</sup>

124 船の種類（フリゲート艦より小型の3本マスト、砲20門装備）

125 ヴィルヘルム王の妃の名。この艦は、プレスト沖等で3隻の仏商船を捕獲。仏軍艦に追われ、西国フィゴ港に逃れ、終戦を迎える。

126 米国南北戦争中に開発された中型艦。

127 赤ひげという綽名の神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ1世。

128 8日付官報。なお、葬儀は、9日に行われた（10日付官報）。

129 中に幾つか教会や寺院がある。

130 パリは、曇霧。

131 ヴァンセンスである。

132 9日付官報。

をシュミツ將軍に送った。

私は、この度市内に送った普軍捕虜の士官4名が最近市内を通行中、我が市民から侮辱的な悪意ある扱いを受けたと聞き、非常に嘆かわしい。この4名の士官を早急にこちらの陣へ送り、この4名を普軍に捕われの同数、同階級の我が士官4名と交換したい（このため、速やかに4名の普士官を市外の陣中に移したという）。

昨日、新聞中に記された政府から市中への発表<sup>133</sup>。

最近、市内貯蔵のガスがいよいよ乏しくなり、市中各道路の灯台に石油を使い、ガスの代用とした。

12月11日<sup>134</sup>

新聞中の発表<sup>135</sup>に次のように伝える。

去る11月12日パリ市内を出発した1気球が普軍の手中に墮ちた。この気球に乗せた数羽の伝書鳩の多くが普軍の手中にある。そうしたところ、この伝書鳩1羽が昨9日夕暮れ5時にパリ市内に帰ってきたが、その翼の裏に1枚の報告書<sup>136</sup>があった<sup>137</sup>。その文にいう。12月7日、ルアン発。当市、普軍に占領された。その軍がシェルブールへと進撃する。オルレアンが、悪魔どもに再占領された。また、ロワール軍完敗。抵抗に救いの見込みない。等々。A. ラヴェルトユジョン

同日夜7時半、第2の伝書鳩が市内に帰って来た。その翼の裏に1通の文書があった<sup>138</sup>。これは、仏政府派遣部所在地トゥールからであった。その文<sup>139</sup>の要旨。

---

133 出典未確認。

134 パリは、曇霧。

135 11日付官報。

136 電報の様式で簡略された文体である。

137 上記官報では、仏諜報員が用いるのと異なる方法で付けられていた旨述べ、具体的な方法を示さず、その部分は正元の意見である。

138 同じく正元の意見である。

139 電報の様式で簡略された文体である。

12月8日トゥール発。なんとという災難。オルレアン再占領される。普軍がトゥールとブルジェからの2リユー<sup>140</sup>の距離。ガンベッタ氏ボルドーに去る。ルアン占領される。シェルブール危うし。ロワール軍なし。脱走兵が盗賊化。農村住民が普軍に協力的。皆うんざり。野は荒廢。強盜横行。馬、家畜の欠乏。どこでも葬式。希望なし。パリ市民に知らせることは、パリだけが仏国ではない、民衆は、意見を言いたい。署名は読み難いがド・ピュジョルまたはピュジェ伯爵(以上は、市内新聞社<sup>141</sup>中に送る一文書である)。

上の2通の報告書が皆普軍による偽の文書で市民の気力を落とし、速やかに開城させようと企てた偽造文書だと判断される<sup>142</sup>。

今日、新聞<sup>143</sup>中に、以前のメッス籠城中の事実が載っていた。メッス要塞の籠城が8月17日に始まり、10月29日に開城した。籠城全てが70日であった。この間、負傷や陣中で病気の兵や病院で死ぬ者の数を8月19日から同30日までの間468人、9月中2,094人、10月中1,522人、総計4,084人と記録した。

12月12日<sup>144</sup>

先日、仏軍が捕虜の普軍士官4名を送り、仏士官4名との交換を求めた。昨日、この交換された仏士官4名が市内に帰った。記録では、この4名の士官が去る12月2日のオルレアン付近の戦闘で捕虜となった。これら4名は、皆少尉で<sup>145</sup>、士官中では身分が低い<sup>146</sup>(日本ではまだ戦闘中、敵味方の間で捕虜の士官を交換する例を聞かない。思うに囲碁で双方が手に入れた黑白の石を交換することに等しい。これは、また一つ変わった便利な方

140 1リユーは約4キロメートル。

141 Le Figaro編集者宛である。

142 上記官報も上記2件の報告は、文体、書体から、独側の偽造とし、ルアンからの文書に署名したとするラヴェルトユジョンは、パリにいたと注記する。

143 11日付le Siècle

144 パリは、曇小雨、霽降る。気温は、零下1度。

145 12日付官報掲載記事。ただし、1名は、中尉である。

146 同記事では、この4名の士官からロワール軍の健在が確認された。

法である)。

昨日、市内でパン屋が皆その門を閉ざし、商売しないということが市中に伝えられ、市中は、一時大きく動揺し、市内の穀類が既に尽きたと街中で叫び、その騒ぎが特にひどかった。

国防政府からパリ住民へ発表の声明<sup>147</sup>。

昨日不安な噂で消費者が幾つかのパン屋に押し掛けた。市民がパンの配給制を心配するが、その心配は、全く根拠がない。政府は、市民への生活物資を注意する義務を負い、供給が不足する状況から程遠い。多くの籠城が恐慌で混乱されるが、パリ市民が賢明なので災いを避けるだろう。

12月13日<sup>148</sup>

パリ市内貯蔵の石炭が既に不足した。諸砲や武器の鑄造が石炭に限られ、薪炭で代用できない。そこで、昨日市内に次の内容の12月11日付国防政府令<sup>149</sup>が発表された。

パリとパリ包囲線内の市町村の5,000キログラム未満で家庭消費を除く石炭とコークスを徴発し、石炭を貯蔵する市民から申告させ、政府が一定の価格でこれを買入れ、違反貯蔵や無申告者には、没収や罰金の刑に処することとし、パリ市及びセイヌ県行政担当閣僚と公共事業大臣がこの命令を執行する。

今日、また仏政府派遣部の移転があった。籠城中、政府派遣部所在地をツールにした。しかし、普軍が諸地方の県や市を進撃略奪し、勢いが益々急迫し、政府派遣部をボルドーに移したという<sup>150</sup>。

12月14日<sup>151</sup>

今日から市内には燃やすための石炭がない。家毎に皆木片でこの代用と

---

147 上記官報。しかし、11日にパリ市担当閣僚ジュール フェリー名の命令でパン屋にある種のビスケットの製造禁止(11日付官報掲載)とパン屋による小麦粉の販売とパン製造以外への使用禁止(12日付官報)が行われた。

148 パリは、曇小雨。

149 11日付官報。同官報が実施手続を定めた公共事業大臣命令も掲載する。

150 出典未確認。

151 パリは、曇小雨。気温摂氏10度。

し、諸機械工作所でのみ石炭を使う。そのため、市中で木片を商う店の門前に人民が群れ集まり、賑わった。

今暁3時、北駅<sup>152</sup>の地方から一つの気球を飛ばした。その中に政府の密使が一人乗り、トゥールまで出発した。この気球の中に市内の昨日までの書状を積み、送ったという<sup>153</sup>。

今市内では多くの屠殺人が犬、猫、鼠を屠殺し、肉を売る。犬、猫の肉は、殊に値段が高く、また1匹の鼠の肉は、その値段が1フラン余りで我が国の金貨の1分に相当する。

12月15日<sup>154</sup>

パリ総督から市中への12月13日付発表<sup>155</sup>。

普国の捕虜である軍士官を両親に持つ何人かの者が負傷者の搬送、死者の埋葬等での軍使による定例の通信があるので、手紙の交換ができると思っている。しかし、これは、全くの誤りである。全ての連絡、全ての手紙の交換は、どんな事情があろうとも戦争法規で厳しく禁じられている。この点は厳しく監視されている。本命令に違反する者は軍法会議により裁かれる。

12月16日<sup>156</sup> (パリ市の籠城今日既に90日である)<sup>157</sup>

昨日、政府から市中各区に壁書きの発表<sup>158</sup>があった。その文の趣旨は、パリ籠城が既に90日に及ぶ。しかし、市内の抵抗の威力が損なわれることがなく、食料の穀類や獣肉はまだ不足しない。先日も発表したように、政府が貯蔵する穀類は大量にある。民衆は安心して、皆同じく防戦に力を合

---

152 原文「アルドン」。Gare du Nord (ギャルドノールの発音) の聞き違いと思われる。記録としては、12月11日午前2時15分及び15日4時45分の北駅出発の郵送用気球打上がある。

153 出典未確認。

154 パリは、曇小雨。

155 12月14日付官報。

156 パリは、曇。

157 この日の官報に5日付のガンベッタからのオルレアン撤退の報告を掲載した。

158 出典未確認。

わせよ。以下省略する。

この頃、天気がはっきりとせず、連日の雨、雪、霞や霧で、城外では戦闘の警報が全くない。双方が兵を抱えて、空しく対陣するだけである。この2、3日、日夜時々城外に鳴り響く砲声が聴こえる。新聞を見ると、これは新たに鑄造した大砲を実験する音だという。この頃、記すような異状がない。ただ、市中の困窮、物品の不足が昼も夜も増し、貧しさに窮まる者が街で泣き叫ぶのが聞え、更には、餓死する者もいる。夜中の市街が一層寂寥とし、全ての家が門戸を閉ざし、市中の灯も稀で、パリの夜景が全く失われた。

12月18日<sup>159</sup>

市中への18日付パリ総督告示<sup>160</sup>に明日19日12時から市の全ての城門を閉じるという。考えると、諸方の城門を籠城の始めから閉ざすことが必要だったが、人民の利便のため、昼間、その出入りを許していた。しかし、普軍のスパイが、度々市内に出入りし、その事情を通報していた。そこで、政府がその通行を禁じ、軍務省や政府の通行許可証がなければ、その通行を許さなくなった。しかし、なお、市内から敵方のスパイに通じる者を制することが難しく、この度、断固としてその出入りを禁じ、門戸を閉ざすことにした。

こうなれば、このように隠れて行方策を実行し難くなるといっても、新聞記事<sup>161</sup>では、昨日、市内にあるセイヌという河の中に、栓をしたガラス瓶が浮かび、流れているのを見た。これを拾って調べると、瓶の中に数通の書状が入っていた。これが市内から普軍に送る、市内の事情を記した密書である。このような内通者共が時々いて、既にこの河の中でガラス瓶中の密書を拾ったことが2度あるという。この河の下流に普軍の陣があるからである。このようにパリ市内でスパイを抑えることが難しい。これは、普軍が戦争の始めから老若男女、児童幼児を多くパリ市中に入れ、市内の

<sup>159</sup> パリは、曇。

<sup>160</sup> 12月19日付官報掲載。

<sup>161</sup> 出典未確認。

状態を仔細に見聞き、調査させているからである<sup>162</sup>。

一昨日以来、伝書鳩が市内に内務大臣の密書を齎した。その文に、政府派遣部所在地トゥールの近郊が全て普軍のために蹂躪され、この市の兵が遠くに退けられ、ガンベッタ内務大臣とトゥールを去り、今ブルジェの地にあると報じた<sup>163</sup>。

12月19日<sup>164</sup>

今日、市中に国民衛兵隊配置の命令<sup>165</sup>があるが、他に変わったことがないので省略する。

最近、市内の石炭がいよいよ不足し、道路の照明台に供給するガスを全く欠いた。そこで、石油を代用し、路上が一層朦朧となった。

今日から市内食料のパン、大小麦の穀類、その上等のものは、既に尽き、パンの色が少し薄い黒色を帯び、薄鼠色ともいふべき色になった。民衆皆がこれを食べる。これは、麦類が下等品のためである。しかし、その味は特に変わらない。

12月20日<sup>166</sup>

今日大統領トロシエウ将軍は、市内の国民衛兵数大隊を引率し、再び城外に出陣した<sup>167</sup>。

新聞に記載の12月6日付ドイツの新聞<sup>168</sup>によれば、北独同盟国のバイエルン<sup>169</sup>国王ルドヴィヒが、独南北の同盟国と協議し、普王に独皇帝の尊号を称させようと企てた。そしてバイエルン王がザクセン王に次の趣旨の同

<sup>162</sup> この方法は、仏側も城外との連絡に使ったという。

<sup>163</sup> 12月18日付官報掲載の14日付ガンベッタ大臣書簡では、オルレアン撤退後ブルジェ滞在、ブルバキ将軍とともにロワール軍再編中などと伝え、トゥール撤退に直接触れていない。

<sup>164</sup> パリは、曇。

<sup>165</sup> 12月19日付官報掲載。従来選挙で選ばれた遊動国民衛兵の士官につき、能力に合った任命をするため、現下の軍事作戦中は、政府が国防大臣の推薦に基づき、任命するとする。

<sup>166</sup> パリは、曇。

<sup>167</sup> 21日の項の戦況報告書。

<sup>168</sup> 20日付 le Temps は、ミュンヘン発とする。

<sup>169</sup> 1870年11月23日、北独同盟に加入した。

日付書簡を送った。

独民族は、数世紀に渉り、言語、文化、科学、芸術により結ばれてきたが、普王の英雄的行動が統一独国の力強さを示す、武力面での協力も成し遂げた。独統一に急ぎ、尽くしたく、そのための交渉を北独同盟首相と始めた。そこで、私は、独国の諸君主、特に陛下には、普国王陛下に、今後北独同盟盟主が独皇帝の尊号を称するよう提案することにご賛同頂きたい。ご賛同頂けると幸いである。また、陛下とともに他の諸君主と諸自由都市のご意見を期待する。等々。以下省略する。

考えると、これは間違いなく、ビスマルク首相が企てたのだろう。今、普国が仏国を蹂躪し、その土地を分け、自分の領土に入れ、内には南北独諸国を併合し、その影響を近隣に及ぼし、小国、弱国を併合しようとする。皆ビスマルク首相の胸中から出ると察せられる。

12月21日<sup>170</sup>

今暁3時頃から、城外北部に対する戦闘が盛んで、遠くに砲声が響くのを聞いた。

昨夜11時、シュミッツ参謀長名の戦況報告<sup>171</sup>による。今夜、パリ総督トロシェウ將軍は、軍の先頭に立ち、明21日夜明けから始まる大軍事作戦のため、出発した。現時点で、100余大隊が城外に動員された。等。

21日午前2時発の戦況報告<sup>172</sup>による。今朝、夜明けから城外モン・ヴァレリアン要塞からノジャン塞城までの間で、大攻撃を開始し、今夕、敵軍のブルジェから来た捕虜100人をサン・ドニに輸送した。総督が軍頭で指揮した。等。

今日の戦闘は、死傷者がとても多く、午後、負傷者が数台の車で市内の病院に帰って来た。しかし、今夕は、まだ勝敗が分からない。

12月22日<sup>173</sup> (日本の11月1日である)

170 パリは、曇。気温氷点下。

171 21日付官報掲載。

172 22日付官報掲載。

173 パリは、曇。



昨21日夜発、ド・ラ・ロンシェール提督とシュミッツ参謀長からの戦況報告<sup>174</sup>による。今朝から終日、引き続き、全方向に一斉に戦いを挑んだ。昨夜、我が軍占領の陣地への敵の攻撃を強力で退けたが、不幸にして、ブレイズ将軍が瀕死の重傷を負い、軍は、有能な指揮官の一人を失った。戦闘がさらに激しく、敵味方の死傷が特に多かった。まだ味方の死傷の数が分からない。サン・ドニ要塞<sup>175</sup>で戦った海軍兵は、特に苦戦し、その死傷がまた多かった。大統領が今夜、諸軍指揮官を集め、最後の作戦行動を調整した。等。

12月21日、パリ発<sup>176</sup>戦況報告による。今日戦闘中、自ら指揮を執り、参謀と共に出了大統領トロシウ将軍が突然に敵砲台の射撃に曝され、危かったが、幸い、誰も負傷せず、その歩み続けた。

12月23日<sup>177</sup>

新聞を見ると、去る15日にヴェルサイユ城の普軍本陣で普王自ら軍への12月6日付の以下の命令を出した<sup>178</sup>。

独同盟軍兵士諸氏よ。

戦争が新たな段階に入った。この前、私が諸氏に話したとき、開戦以来、我らに抵抗してきた敵軍の最後の部隊がメッス要塞の落城により殲滅された。それ以来、敵が異常な努力で新たに編成した部隊で我らに抗う。仏国の大半の住民は、我々が妨げもしないのに、穏やかな仕事を捨て、武器をとる。敵は、度々数の上で我らを上回るが、諸氏がそれを打ち破るのは、勇氣、規律、大義への確信が数の多さよりも価値があるからだ。到るところで、パリ解放のために、進んでくる敵軍が例外なく敗れた。多くの要塞が我が軍の掌中に落ち、多くの兵器等を捕獲した。私の大きな喜びは、諸氏が私を大いに満足させることをこの目で見たこと

---

174 23日付官報掲載。

175 市内に東、ダブル・クローヌとラ・ブリッシュの3要塞があった。

176 23日付 le Journal des débats 引用の la Vérité 記事。

177 パリは、晴。

178 24日付官報。

である。私は、将軍から一兵士に至る迄諸氏皆に感謝する。もし敵が戦争を続けることにこだわるならば、諸氏が決意した血と生命の大きな犠牲に値する栄光ある平和を勝ち取るまで、諸氏が今日までの成功をもたらしたと同じ勇気を奮い続けることを私は知っている。等。

12月24日<sup>179</sup>

市内に発表した戦況報告書<sup>180</sup>による。昨日、ヴィル・エヴラール<sup>181</sup>の地下蔵にいた敵兵が我が軍の占領した陣地を襲撃し、その戦闘が非常に激烈であった。この時、ブレイズ将軍が軍頭に立ち、大至急で駆け付けたが、瀕死の重傷を負った。今日の戦争では、双方ともに負傷戦死が最も多いという。

去る15日、仏政府派遣部所在地ボルドー（ボルドーは仏西南部にあり、バルティック海の海岸に近い<sup>182</sup>。以前、パリ籠城中、仏政府派遣部をトゥールに置いた。近日普軍が次第に諸県、市に乱入、蹂躪し、政府派遣部所在地トゥールのほとんど近くまで襲来した。そのため、その政府派遣部を再び移転し、遠く、このボルドーに置いた。そこでパリはもちろん、仏諸地方のことを全て、この政府において判断した）で市街海岸港内に壁書きした発表文<sup>183</sup>によれば、この戦争中の政府派遣部をボルドーに置くこととし。この港に外国船の滞在、入港を禁じ、現在、港内に停泊する各国の艦船全てに今月15日から26日までに退去を命じた。セルキニーからルアン、ル・マンからトゥール、トゥールからアンジェーの鉄道線路の運行のための人員が編成された。等とのことである。

今日、新聞<sup>184</sup>の附録では、昨日一人の商人が1,000個の鶏卵を1,023フラ

179 パリは、晴、気温は一気に下がり、零下8度。

180 21日の項で引用の23日付官報。

181 ヌイー・スュル・マルヌにある精神科病院。

182 これは、誤解である。

183 24日付le Temps記載の15日付ボルドー発報道によれば、閉鎖された港はボルドーではなく、ル・アーヴル、ディエップとフェカンの3港であり、11日間の期限付きで退去を中立国艦船に求めた。ただし、23日付le Journal des débatsによれば、ディエップは12日には占領されており、上記の鉄道路線も13日には切断されていた。

184 出典未確認。

んで売ったという。卵1個が1フラン2サンチーム（日本で3朱300文余り）である。その高値に驚くべきである。しかし、人が求めるものは、非常に稀にしか売られず、容易く買えない。

パリの籠城が既に100日、市内の抵抗の力がやや緩み、気力が大きく衰えた。色々その事情を観察すると、以前、政府が頼みとしたのは、専ら地方からの救援軍であった。もし、地方の救援軍が敵の背後を襲い、進んで市外まで近づく機会があれば、忽ちに市内の兵を挙げ、追い払おうと憤りも露わにし、内外の仏軍が協力し、敵の囲みを破り、進撃の道路を開こうとするだろう。そうであったが、普軍幕僚がこのことを察し、先回りし、兵を配備し、頻繁に地方の救援軍を追い払い、その根拠地を暴き、進んで政府派遣部のあるトゥールに迫り、地方の救援軍が遠くに逃げた。

そこで、パリ市内の望みが一度に失われ、活路を求めようがなく、敵を排除する策もない。大統領トロシュウ将軍が内外の国民衛兵を率い、城外に布陣するといっても寒さの厳しい時期であり、連日の雪や霜に曝され、兵士は、このために手足に傷を負い、病気になった。今、仏普両軍を上から見て、状況の進退や難易を推察すると、一日何もせず日を送れば、城中では一日分の食料を費やし、落城の時が一日近づくことと同じである。これでは、攻撃兵の戦略が一日毎に進捗し、防衛兵の抵抗力が一日毎に消耗する。その利害得失が時々刻々明らかになる。明日の状態もまた推察できるだろう。

(巻の4完)